

自閉症・情緒障害特別支援学級に在籍する自閉症のある児童生徒の国語課教育の在り方について

司会:	菊地一文 (国立特別支援教育総合研究所)
分科会の説明と内容:	廣瀬由美子 (国立特別支援教育総合研究所)
ワークショップ:	小澤至賢 (国立特別支援教育総合研究所)
事例発表者:	藤田直子氏 (茨城県取手市立戸頭西小学校 教諭) 深澤しのぶ氏 (神奈川県伊勢原市立中沢中学校 総括教諭)
指定討論者:	石塚謙二氏 (文部科学省初等中等教育局特別支援教育課 特別支援教育調査官)

第2分科会では、まず司会より、話題提供者、指定討論者の紹介があった後、廣瀬より、本分科会の趣旨、概要説明があった。次に、国語科学習評価シートを用いて、参加者が自閉症・情緒障害特別支援学級に在籍する児童生徒を想定し実際にチェックを行うワークショップが行われた。その後、上記2名の話題提供者(実践研究協力校)からの報告として、藤田氏からは高機能自閉症の男子児童、深澤氏からは広汎性発達障害のある女子生徒の国語科指導の報告があり、会場との質疑応答が行われた。最後に、指定討論者の石塚調査官より、研究及び事例報告に関する観点が示された(以上、要項p32-p39 参照)。

<ワークショップ>

小澤より、学習評価シートの作成過程について概略の報告があった。その後、現在の評価規準に照らした習得状況の評価、要素の細分化、下学年の評価規準に照らして評価の各ステップの説明があった。その後、参加者が各々担当している児童生徒を想定して、学習評価シートを用いてチェックを行った。さらに、その後のステップで、評価から改善につなげていくための手順、指導内容を見直す観点についての説明があった。

<事例発表>

事例1: 藤田氏より、高機能自閉症男児の事例についての報告があった。評価結果を年間計画に反映し、授業時数の検討や各単元の指導内容の重点化・省略化を行った経過、つまずきの予測と対処(心情曲線を用いた取組等)が紹介された。「経験則でやっていたが、シートの活用によって自信を持って指導できるようになった」とのコメントがあった。

○質疑応答

質問者: ①国語科評価シートを作る上での条件は何か(全学年で実施すべきか、来年活用するには今年評価が必要か、等)②授業時数について、一つのクラスの中で一人一人が異なるということが成立するか。自分は知的障害学級で5人を担当している。

廣瀬: ①について、小中学校小1から中3までシートを作成した。国語科は2学年ずつの評価規準となる。深澤氏は中1の生徒の入学時に評価している。評価の目的は子どもの状況を理解して授業に反映させることであり、あまり早期までさかのぼる必要はない。

藤田氏: ②について、同じ悩みを持つ教員は多い。小集団での学習で似たような傾向の児童同士を組むなどの工夫。今年是一年間の計画を立てられたが、来年度違うタイプの児童が入ると変わってくる。その際は、有効だったエッセンスだけでも取り入れて指導したい。

石塚氏: 特別支援学級の教育課程は一本化はしなくてもよく、可能な限り、複線化してもいい。また、生活単元学習は、領域・教科を合わせた指導だが、どの子にも同じようにする必要はなく、子どもによって重点を置く指導のねらいや指導内容は違っている。それぞれの子どもにとって必要なものを最大限組み合わせられるかが鍵である。

事例2: 深澤氏より、広汎性発達障害女子生徒について、評価結果を授業時数、指導形態や内容に反映し、生徒のニーズに応じて通常学級の単元計画と異なる目標に取組んだ報告があった。「学習評価シートの有効性として、客観的な手がかりとなったこと、ねらい、評価の視点の明確化が可能になった。また学校として国語科教員の通常の授業にも変化があった。」というコメントがあった。

○質疑応答

質問者: 自分は通常の経験が長かったが、特別支援学級ではカリキュラムが経験則に基づいているので戸惑っていた。このシートを使うことで通常の先生との共通理解ができるし、積み重ねにも有意義と感じた。「評価規準」と「評価基準」の違いは何か。

廣瀬: 国研が出しているのは規準(のりじゅん)で、各学校ではそれに基づいて基準(もとじゅん)を作成することになっている。

深澤氏: 学校で評価基準を作成している。ある男子生徒については、他の生徒と同じテストを受けたい希望があり、当該学年の評価基準で、同じテスト・同じ評価をしている。

質問者: 評価基準については通常教育でも難しく、課題である。このようなニーズのある子どもたちにどんな基準を作るのか研究をして欲しい。

廣瀬: その点については、特別支援教育対象の子どもたちには個別の指導計画を作成する。通常の中身を踏まえつつ自立活動の中身を入れて、計画することが難しいところ。この研究でも、基準の研究は難しかったので国研の評価規準を使った、という経緯がある。

<指定討論者より>

この研究への興味・関心は、自閉症のある子どもに特化した教育課程があるのかということ。東京都は、知的障害特別支援学校に自閉症学級を設置している。教育課程が異なることは、条件整備の違いにむすびつく。自閉症のある子どもの評価基準をすぐにつくるのは難しいので、通常基準(もとじゅん)に照らしてやってみて違うところがあればそこを見る、数値等で評価してみて自閉症のある子どもの状態を知るなど、通常基準を適用してみて次どうするかを考えるということではないか。この研究は、基本的に、知的遅れがなく当該学年のカリキュラムで学習している子どもが対象なので、特別支援学級における下学年適用や精選の問題、通常学級における授業での工夫や指導内容の重点化・焦点化などによって、自閉症のある子どもの教育課程の像が見えてくるのではないか。今回のシートの活用は、その子どもに何を教えるか、説得力のあるものとして説明責任を果たしている。「何となく」ではなく、説明できることが重要。今日の課題は教材研究の課題。ある単元で何時間かけて何を教えるかを考慮し、アセスメントでの得意不得意を踏まえ、教科指導の題材をとらえ、それを自閉症の特性に則って計画・実施した。これは自閉症だけでなく、他の障害でも使える。事例について、シートで明らかになった習得状況の中に、自閉症の特性が反映されているかもしれない。特性に応じて指導内容を絞り込む必要がある。そのことによって、自閉症のための教育課程が明確になるのではないか。これらの成果は、通常学級のユニバーサルな授業に活用可能で、通常学級にいるアスペルガー等の子どもが助かる。自閉症・情緒障害学級で行っていることが通常学級の教育に生きる。視野が広い研究として期待したい。

<まとめ>

研究の流れの紹介とともに、実践知の中に成果を見いだすことができた。自閉症の子どもの得意な所を伸ばし苦手な所にどうアプローチするか、可能性が見えてきたのではないか。